

杉原志啓・富岡幸一郎編

『稀代のジャーナリスト 徳富蘇峰』

1863—1957』

藤原書店 二〇一三・一二刊

A5 三二八頁 三六〇〇円

大河ドラマ『八重の桜』(二〇一三)のラストシーンを覚えているだろうか。戦争を憂う新島八重に対して軍備増強の必要性を語る若者―彼こそが本書の主人公、徳富蘇峰である。

本書では総勢二七名の執筆者により、明治から戦後に至る迄の九五年間を生きた徳富蘇峰の「人生」が論じられている。その内容は多岐にわたり、限られた紙幅では目次の全てを掲載することも難しいため、概観を示すことで紹介の責を塞ぎたい。

第一部「徳富蘇峰と近代日本」では、明治から戦前の日本社会に関する蘇峰の言説を考察した桶谷秀昭「近代日本精神史に於ける徳富蘇峰」と、戦後日本の国際関係に関する言説を考察した坂本多加雄「徳富蘇峰と戦後日本」の二本を収録している(なお、戦後の日本社会に関する言説については第II部収録の杉原志啓「蘇峰と現代」が詳しい)。ここでは蘇峰という人間を理解するための概念として「時勢」「大勢」というキーワードが挙げられている。

第II部「いま、なぜ徳富蘇峰か」では、まず杉原志啓「徳富蘇峰の全体像」が蘇峰の持つ様々な顔(ジャーナリスト、新聞雑誌経営者、思想家、歴史家を解説した上で、その個々の側面に注目した論

考を収録している。これらの論考を大別すると三つの分析視角にまとめられる。まず蘇峰「自身」を論じたものが四本(井上智重「蘇峰の原郷」、齋藤洋子「蘇峰の欧米視察」、有山輝雄「タテマエの「立言者」徳富蘇峰」、澤田次郎「蘇峰の対英米観の変遷」)、次に蘇峰から見た「他者」を論じたものが四本(伊藤彌彦「新島襄と蘇峰」、西田毅「蘇峰と明治の政治家たち」、尾形明子「徳富蘇峰と長谷川時雨・吉屋信子」、梶田明宏「徳富蘇峰における明治天皇と昭和天皇」)、最後に蘇峰の「作品」を論じたものが二本(桐原健真「徳富蘇峰『吉田松陰』と「維新」の行方」、富岡幸一郎「終戦後日記」を読む)である。このように徳富蘇峰という人間がその人生の中で遺してきた足跡を丁寧を追った論考が並んでいる。

第三部「蘇峰をめぐる人々」では、蘇峰と交友のあった一五名の人物について解説した小論を収録している。幕末の横井小楠(松浦玲執筆)から始まり、戦前では福地桜痴(山田俊治)、三宅雪嶺(中野目徹)などの同業者から与謝野晶子(小嶋翔)、高群逸枝(丹野さきら)といった女性知識人まで多様な人物が取り上げられている。また戦後では正力松太郎(竹内洋)との関係が論じられており、これだけでも彼の九五年にわたる人生の厚みを感じられよう。

その他にも蘇峰の年譜や関連系図、著作目録などを収録した「資料」編が付されている。全三二本の論考(インタビュー・鼎談記事を含む)においては、各論考間で重複や分量・精度の差が見られないわけではないが、いずれも徳富蘇峰という人物に関する重要な論点が提示されており、彼を知る上で欠かせない一冊となっている。さて本書を読んでいると「悪名」という単語を何度も目にする

だろう。先の大河ドラマのシーンに象徴されるように、彼はその帝国主義的な論調によって帝国日本の旗振り役を務めた「御用記者」というイメージが強かった。そうした「悪名」だけでは捉えきれなかった彼の多様な生き様を描き出した点こそが本書の特徴だと言える。もちろん、今まで「クロ」とされてきたものを単純に「シロ」へと反転させるだけの議論は生産的ではないし、本書が意図する所でもないはずである。近代という時代を考えるに当たり、その時代と共に生き、時代と共に消えていった徳富蘇峰という人物のありのままの姿を描き出すことが今後の研究でさらに目指されるべきであろう。本書はその確かな案内人役を務め得る一冊であることを確信する次第である。

(團藤充己)